

第1章 戦場

千葉での終戦

海からの砲撃

岩に腹を押しつけろ

清野 隆さんのお話から

○徴兵検査 兵隊にふさ
わしい性質や才能などを
判定するために身体や身
上を検査すること。

○特攻隊 特別攻撃隊の
略称。特に太平洋戦争
中、体当たりの攻撃を行
った日本陸海軍の部隊。

終戦間際の昭和十九年（一九四四年）、私は二十歳で徴兵検査を受けました。この年からは、十九歳の人も検査を受けることになりました。それだけ兵士が必要になつてきただということでしよう。当時は、男は軍隊に行かないと一人前に見られなかつた時代でした。体格がよくない私は、兵隊に行けなかつたら困ると思い、本心とはうらはらに「特攻隊やります。」と言いました。とにかく徴兵検査のときは特攻隊に志願するということで合格できました。

旭川で歩兵部隊の訓練をしていたときは、規則正しい生活で、しかも戦地ではありませんから、比較的気楽でした。

その後、千葉へ移動したらいろいろ大変になりました。ご飯以外は普通の軍隊と同じですが、ご飯に混ぜるもののがソラマメなのです。あれは、慣れないせいか随分こたえました。ソラマメもお菓子として食べるにはいいのですが、ご飯にませたらだめなのです。柔らかいけれども、おいしくないのです。

また、アメリカの艦載機の攻撃を受けることもありました。海面すれすれに飛んできて、陸に来たら少し上がって、動くものを何でも機関銃で撃つのです。撃たれたらすぐに道路の側溝に伏せて、過ぎ去るのを待ちます。道路縁の木に弾が当たつたり、銃弾が刺さつたりすることもありました。

千葉では海防監視と敵前上陸を防ぐのが任務でした。アメリカの艦隊が房総沖に侵攻してきたときに備えて、破甲爆雷という木でできた一キロぐらいの箱に火薬をびっしり詰めたものを

○キヤタピラ 鋼板を帶状につないで、車輪の周囲に取り付けた装置。ブルドーザーや雪上車の車輪を思い浮かべると分かる。

持つて、上陸してくる敵の戦車のキヤタピラの下に行く訓練をしました。自分が入るのではなくて、破甲爆雷を入れるので、とにかく戦車のキヤタピラのそばまで行かなかつたらどうということはできないのです。兵隊は海岸縁で、直径一メートル、深さ一メートルくらいの、目標だけが少し見えるくらいの穴を掘り、そこに入つて待機しているのですが、そど普通の装備は持つてているのですが、そんなものは役に立ちません。

○地曳網 沖合いに網を張り巡らし、それを陸上に引き寄せて魚を獲ること。またはその網。

○千歯こき 米を脱穀するための道具。

それでも、千葉県は東京と比べるとわりと安全だつたと思います。漁師の家で兵隊みんなで地曳網をひく手伝いもしました。それから、農家でも千歯こきなどを使つたソバや麦の脱穀作業を手伝つたりしました。それは本当にのどかな感じで、自分のふるさとへ帰つたような気がしました。

しかし、戦時体制ですから、厳しいこともあります。一回しかありませんでしたが、房総半島沖に敵艦隊が接近中という情報が入りました。「Aが何隻、Bが何隻、房総半島に接近中。上陸の公算



訓練の様子

イメージ図

○駆逐艦 砲・魚雷などを主要兵器とし、敵の主力艦・潜水艦・航空機を撃破するのを任務とする小型の快速艦。

大なり。各隊直ちに戦闘配置に着け。」という命令が出ました。暗号ですから、Bが戦艦でAが駆逐艦だというふうに決まっているのです。そうすると、訓練していたとおり破甲爆雷とショベルと小銃を持つて海岸縁に出て、五メートルおきに穴を掘つてそこに潜るのです。そのとき、近くの住民の人たちは「上陸してきました。我々はどうなるのでしょうか。」と心配して、私たちも返事に困つたことがあります。」「とにかく山の中に入つて逃げていった方がいいよ。」ぐらいしか言うことができないです。

それから、一度、砲撃を受けました。そ

れは私たちを狙つた砲撃ではなく、班長の話では四キロぐらいい離れたところにある砲兵陣地を狙つたものではないかという話でしたが、海岸から潜水艦が砲撃しているのです。撃つたときの砲撃音がすごいのです。防空壕の中に入つても、腹がすぐ振動するのです。実戦の経験のある班長たちは、「こら、おまえら、岩に腹をひつづけておけ、岩に腹を押しつけて見ていろ。」と言うのです。撃たれているのを見



陣地が砲撃されているところ

イメージ図

せんかん

はこうばくらい

くわいかん

がくちくかん

はこうばくらい

くわいかん

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

ているだけなのに、あまりにも衝撃が大きいので腹を岩から離してはだめなのです。実戦に近い経験をしたのは、敵前上陸の待機をしたときと、この砲撃の二回だけでした。

私どもは、神の国というか、戦争に負けたことのない国、国民ということで教えられてきましたから、戦争に勝つことを疑うことはありませんでした。八月十五日に玉音放送があるということは教えられたのですけれども、聞くことはできませんでした。ですから、負けたということは実感はありませんでした。実際に敗戦になつたことが分かつたときの思いは、これからどうなるのだろうということだけでした。とにかく、千葉県から北海道へ帰りたいと思いました。

北海道に帰つたのは、終戦後の九月二十日ごろでした。函館に着くと港の近くには、潜水艦にやられたのか、爆撃でやられたのか分かりませんが、船が何艘も沈んで、煙突などは赤くさびていました。

○進駐 軍隊が他国の領土に進軍し、とどまっていること。

○忠君 君主に忠義をつくすこと。

それから、アメリカ軍が進駐してくるという話になつて、敗戦のみじめさを味わうことになりました。一番みじめさを感じたのは、今まで教えてきた忠君愛國とか、目上の人の言うことは忠實に聞かなければいけませんとかいうことが全部だめだというふうになつたことです。ずいぶん戸惑いました。

今の若い皆さん方は本当に規律正しく、しつかりしていく素晴らしいと思います。これからも戦争のない時代をいつまでも続けていってほしいと思います。どんなに世の中が変わつても、戦争だけはない平和な国であつてほしいと願っています。

DATA

平成22年度厚別区平和事業

聴き取り

- ・平成22年6月10日
- ・厚別区役所



清野 隆(せいの・たかし)さん

- ・大正14年(1925年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住